＝市史編さん便り＝　【33 号】　令和 5 年 8 月 28 日(月)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

万次郎人生の概観⑧

「万次郎の帰郷と幕臣への登用」

(１)中浜帰省は僅か「３日３晩」

苦難を重ね、やっとの思いで 11 年ぶりに中浜へ帰郷した万次郎であったが、中浜で母と過ごせたのはわずかに 3 日 3 晩であった(註 1)。

藩主により高知城下へ招聘され、給料が支給されて御小物に取り立てられて武士となった。これによって帯刀が許されたが、苗字はこのとき、まだ名乗ることが許されなかった。万次郎は、母を城下に呼び寄せたいと思ったが、住み慣れた中浜から移住することを母は拒んだ。仕方なく万次郎は、一人で城下山田町に借家して生活することになった。

万次郎の職務は、土佐藩校である教授館で将来有望な青年藩士等に英語を教授することだった。後に一緒に仕事することになる後藤象二郎少年も目を輝かせて学んでいたに違いない。また、直接面識があったかどうか定かではないが、坂本龍馬や岩崎弥太郎も恐らく万次郎の海外情報に魅了され、感化されたに違いない。

(２)ペリー艦隊、日本へ

弘化三年(1846)、米国は当時の東インド艦隊司令長官ビッドル(1783－1846)を派遣して日本との国交を求めたが厳しい鎖国政策を取っていたため拒否された。その頃、米国はメキシコとの戦争に勝利し、嘉永元年(1848)にカリフォルニア一帯を領有した。ここで鉱脈が発見され、「ゴールドラッシュ」が起こった。万次郎がこれに着目し、帰国資金を稼ぐために金鉱掘りに来たことは「市史編さん便り第 28 号」で紹介した通りである(註 2)。

これ以降、米国の関心はにわかに太平洋岸に集中した。米国は太平洋を越えて、アジア諸国に経済進出することを考えるようになった。同時に、北太平洋での捕鯨も活発となっていた。そのため貿易や捕鯨で長い船旅をするとき、食料・水・燃料の補給できる寄港地が必要となり、日本への開港要求も高まっていった(註 3)。

嘉永六年(1853)7 月 8 日、当時の米国東インド艦隊司令長官ペリー(1794―1858)は 4 隻の黒船(軍艦)を率いて浦賀に来航した。米国大統領フィルモアの国書を手渡すためである。その態度は軍艦等の軍事力を背景に強硬で執拗なものであった。長崎で交渉をとの幕府の提案を無視し、江戸湾の測量も行う等の挑発行為を続けた(註 4)。

初動は、浦賀奉行所与力中島三郎助と通辞の堀達之助が対応したが、十分な対応もできなかった。幕府高官が対応すべきところを一地方役所が対応しているお粗末な状況であった。7 月 14 日、多数の日本陣営が立ち会う中、約 300 名の米国海軍と軍楽隊を伴いペリーは久里浜に上陸した。そこで浦賀奉行戸田伊豆守と井戸石見守が日本の法律を曲げて大統領の国書を受領した(註 5)。

（３）万次郎の幕臣府への登用

7 月 17 日、大統領国書の回答を受け取るために来年再び来航することをペリーは幕府に予告し、江戸を後にした (註 6)。

老中阿部正弘を中心に幕閣は今後の対応に追われた。そのためにも米国のことをもっとよく知り、その真意をつかむことが大事である。英語と米国事情をだれよりも知っているのは、実際に米国へ住んでいた万次郎以外に存在しない。長崎奉行からかつてその帰国の顛末について報告を受けていた万次郎に白羽の矢が当たった。

開国論を主張する儒学者大槻磐渓は、万次郎が米国で天文・測量・航海・砲術まで学んできたことを林大学頭に意見提出し、これを通じて老中阿部正弘に万次郎の幕臣への登用を推薦したことがその真相である(註 7)。

万次郎は、8 月 1 日土佐を発ち、江戸に同月 30 日に到着した。万次郎は、江戸鍛冶屋橋の土佐藩邸にしばらく身を置いた。老中阿部正弘、林大学頭、勘定奉行川路左衛門尉、伊豆韮山代官江川太郎左衛門といった幕閣の要人も万次郎を屋敷等へ招き、海外事情を聴収した。万次郎の受け答えは要を得ており、各人を納得させた。

特に、伊豆韮山代官江川太郎左衛門は、幕命で蒸気船の製造に取りかかっており、万次郎の知識を必要としていた。そこで幕府に許可を得て、万次郎を屋敷の長屋に居住させ、この製造に関わらせることにした。この頃より、万次郎は「中浜」姓を名乗るようになる。万次郎の住所を土佐藩邸から離すことになるので、土佐藩の許可が必要となり、老中阿部正弘は土佐藩留守居役原半左衛門を役宅に呼びつけ、強制的に幕府普請役格として幕臣とすることを命じた。給料として切米 20 俵 2 人扶持が支給されることになった(註 8)。

（次に続く）

註

(註 1)1880 年咸臨丸で万次郎がホノルルに寄港したとき、デーモン牧師に再会し、中浜滞在が 3 日 3 晩であったことを牧師に話した。牧師はこのエピソードを『フレンド』誌(牧師が発行していた雑誌)に投稿した。

(註 2)笠原一男「第 4 部近代・現代」(『詳説日本史研究』山川出版社、1981 年、314－316 頁)

(註 3)(註 2)に同じ。

(註 4)(註 2)に同じ。

(註 5)中濱　博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』冨山房インターナショナル、2010 年、130―137 頁。

(註 6)(註 5)に同じ。

(註 7)(註 5)に同じ。

(註 8)(註 5)に同じ。

【編集後記】

早いもので 8 月もあと数日となりました。まだまだ暑い日が続きますが、心なしか朝夕が少し凌ぎやすくなったような気がします。市史資料編の残す原稿提出も、「第 2 節中世～近世石造物」「第 3 章市域中世山城上空写真」「第 4 章学校資料から見る地域の教育・社会・文化」の 3 章分になりました。あと一息です。市制発足 70 周年の記念となる市民のための地域学の基軸書をめざします。最後の最後までご協力をよろしくお願いいたします。(田村)